

# 三河の文化を訪ねて

第113回 - 豊田 -

## 和紙工芸と四季桜の美が織り成す小原の里

豊田市立小原中学校長 西崎 修

「こうぞ打つ 三拍子こそ さみしけれ 小原の里の 雪の夕暮れ」(藤井 達吉)  
山あいには点在する農村の風景を人々は、「小原の里」とよび、暮らしている。ここには、旧小原村の時代から、和紙工芸や四季桜といった地元の人々によって受け継がれてきた有形、無形の文化が数多く点在している。他には見られない伝統的な小原の文化にふれてみよう、今も県内外から観光客が集まる。小原の里で人々の営みとともに受け継がれ、古人の思いをのせて現在、そして未来へと伝わる和紙工芸と、四季桜に代表される、小原の文化を紹介する。

### 和紙のふるさと

小原地区は、豊田市北部に位置し、岐阜県境で土岐市、瑞浪市、恵那市と接する中山間地に広がる。平成17年度に豊田市と合併する前は西加茂郡小原村であり、今も一つの中学校、三つの小学校の学区に分かれ、人口は約3600を数える。少子高齢化と相まって、今後は更なる過疎化が心配される地域である。

小原では、古くは室町時代から手漉き和紙が盛んに作られており、和紙の原料となる楮の育成に適した土地柄として、たがみ 紙や ばんざがみ 番傘紙を作る良質な三河森下紙の産地として知られてきた。明治以降の生活様式の変化により、大正末期から昭和

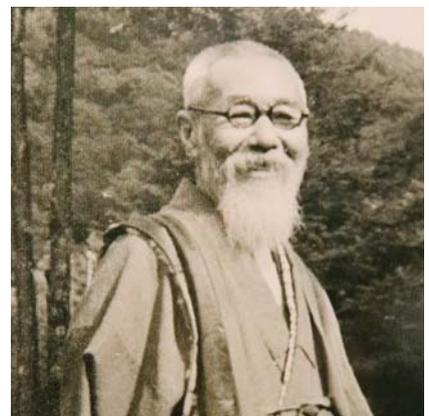
の時代にかけて和紙の需要が減少し、和紙生産は日本各地で衰退していく。小原でも紙を漉く人は次第に減少していく中、小原和紙を美術工芸として復興させたのが、現碧南市出身の藤井達吉である。

昭和の初期には、絵画・彫刻・陶芸・漆芸・七宝・紙工芸など総合的な芸術家として知られていた達吉は、図案集出版のための和紙を小原に求めたことが縁となり、昭和7年、9年、11年と3度この地を訪問する。小原和紙に芸術性を見出した達吉は、和紙を上手に漉き、製造することから色彩豊かな和紙工芸として発展させていくことの重要性を集まった村人に説く。



藤井達吉作 和紙漉き込み「うぐいすよ」

うぐいすよ なげよなげなげ  
はるの日は わがいはにはに  
きなげ ぞよもせ



藤井達吉 (昭和30年代)



鳥屋平図 (春日井正義作)

昭和20年、太平洋戦争の戦況が悪化すると、達吉は当時住んでいた神奈川県真鶴市から疎開し、鳥屋平とりやまへい(現在の小原地区北大野町トヤガ平)にて窯や紙漉き場、画室、共同工房など多くの建物をつくり、芸術村の建設をめざした。達吉を慕う人々がそこに集まり、小原総合芸術研究会を発足(2年後に解散)させ、本格的な芸術村をスタートさせる。そのころから小原和紙工芸の指導と制作方法の開発に情熱を注ぎ、昭和22年には達吉の指導による作品が日展に出品され、入選する

までの水準に達するようになる。鳥屋平に集まる小原の若者たちには強い刺激となり、しだいに達吉のもとに出入りし、薫陶を受ける小原の人々も増えてくるようになった。

彼らは昭和23年に小原工芸会を創設し、時には激高する達吉の大変厳しい指導の下、和紙工芸の研究と芸術性向上に取り組み、やがては日展で入選するまでに成長し、今日の豊田小原和紙工芸の発展につながっていった。

藤井達吉の教えを直接受け継いだ安藤繁和、小川喜数、春日井正義、加納俊治（いずれも故人）、山内一生などの工芸家が、地元で創作に打ち込み活躍することと、かつて三河森下紙と呼ばれた小原和紙は、「美術工芸和紙」として芸術的領域にまで高められるようになった。

今でも和紙工芸を志す芸術家が小原に工房を構え、日展等多くの展覧会において入賞し、その名を海外にも広めている。小原の和紙工芸については、豊田市の総合施設「和紙のふるさと」で詳しく知ることができる。その中の「和紙工芸館」では和紙の原料加工から創作の実際までを体験することができる。「展示館」では創始者の藤井達吉とその後継作家の芸術品の一部を鑑賞することができる。



川見四季桜の里

まつりが盛大に行われ、他では味わうことができない、満開の四季桜と紅葉が織り成す景色を楽しむことができる。

小原中学校では、地区で長年受け継がれてきた四季桜の植栽を教材として取り入れ、毎年6月に地域講師の指導により、1年生で四季桜の挿し木を行い、苗木を育てる活動を続けている。大きくなった苗木は校内の育苗圃に植え替え、3年生まで校内で育て、卒業時には2メートル近くに伸びた四季桜の枝を持ち帰り、自宅付近に植樹して地区の四季桜を増やす取り組みが続いている。

また、平成23年の東日本大震災の復興

小原地区の小中学校では、地元の講師を招いて総合的な学習の時間や図工・美術科などで和紙工芸について調べたり、制作に取り組んだりして、地域で受け継がれてきた小原和紙を伝統文化の一つとして学んでいる。



山内一生作 和紙工芸作品  
[日月文]



四季桜の挿し木を受け継ぐ中学生

に取り組み岩手県陸前高田市のNPO法人「桜ライン311」に生徒会が協力して、津波到達点に桜を植え、後世に残すために、小原四季桜の苗木を毎年送る活動を続けている。



小原四季桜等のおもな分布図

## 四季桜の里

小原の四季桜（バラ科）は、江戸時代の文化7年に現小原北町の藤本玄碩（げんせき）（文政13年没）という漢方医が名古屋方面から苗木を求めて植えたのが親木となつて広まったといわれている。この親木は明治34年、旧福原小学校（昭和53年に小原中部小学校へ統合）創立の際に藤本家より運動場へ移植され、見事な樹勢を誇っていたが昭和9年の室戸台風により倒木となつてしまふ。枯死を惜しむ人々により、その子桜から分かれた孫桜の数々が今の小原四季桜のもとになったと伝わっている。

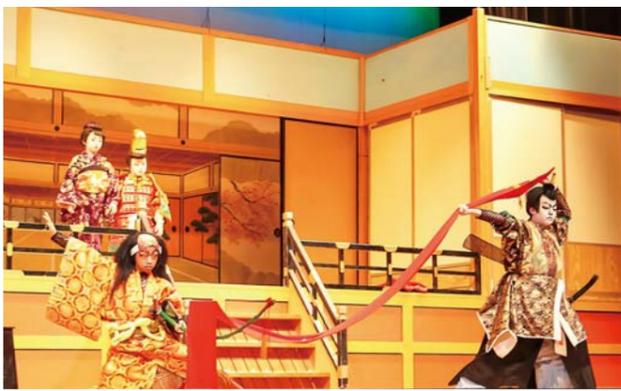


四季桜発祥の記念碑（小原北町）

## 受け継がれる文化

和紙工芸、四季桜の植栽の他にも、古くから受け継がれているものとして小原歌舞伎と俳句がある。

小原歌舞伎は、江戸時代の中ごろから地区の神社に舞台ができ、祭礼等で奉納する地芝居として始まり、娯楽が少くない農村の楽しみのひとつとして広く親しまれたといわれる。明治中期には地芝居を会得した芸達者が集まる万人講による上演が人気を集めるが、昭和30年代になると衰退し途絶えていく。しかし、昭和47年7月、未曾有の豪雨で小原が被災した



小中学生による子供歌舞伎「奥州安達ヶ原三段目袖萩祭文の場」

普通の桜は春に一度だけ花を咲かせるが、四季桜は1年の間に4月と10～12月の2度、花を咲かせる。秋から冬咲きの桜は珍しい品種として日本各地でも見られるが、四季桜と呼び、保護している地域は全国でもわずかである。夏以降、少しずつ咲く花は特に珍しい。小原では日露戦争後の明治39年、出征戦没者の忠魂碑建立の際に分植された前洞町の四季桜が、樹齢百年を超え、県の天然記念物に指定されるなど、今も大切に保護されている。

旧小原村では、四季桜を昭和53年に村の木に制定し、村民の手で分植を続けてきた。当時は四季桜を株分けで増やす方法しか知られていなかったために増殖は難しく、わずかに植えられているだけであった。しかし、尾張の園芸家を招いて接ぎ木等により増やすなどの試行錯誤を経て、その後行政、森林組合との連携などによる研究も進み、挿し木による植栽方法が確立し、各家庭へも配布して公共施設や山林への植栽が広がっていった。10～12月には各所で満開の四季桜を見ることができ、今では1万本を超える四季桜の木が植えられている。官民一体となって整備してきた、ふれあい公園、川見町、大洞町などの公園では、毎年四季桜

ことをきっかけに、小原歌舞伎復興の機運が高まり、地元の小原歌舞伎保存会の活動につながり、現在は市の指定文化財として保存継承されている。年2回の公演には、子供歌舞伎もあり、内外から多くの観客を集める。

また、小原における俳句の広がりも、大正末期から昭和初期にかけて、高浜虚子に師事し、女流俳人として活躍した杉田久女が小原に住んでいたことによる。今も杉田久女を顕彰して、毎年小中学生も応募する俳句大会を催している。

これらはいずれも、ここ小原の里に暮らす人々が長年にわたって慈しみ、労苦をいとわず受け継ぐことで、有形無形の財産として今に伝わるものである。先代の人々から現代社会を担う大人へ、そして未来を見つめる子どもたちへと受け継がれる強い意志によつてはぐくまれ、激しく変貌する時流の中にあつても小原の確かなアイデンティティとして、過去から未来へと織り成す文化の美しさを伝えている。

## 〈資料提供・取材協力〉

- ・豊田市和紙のふるさと
- ・豊田市郷土資料館
- ・小原観光協会
- ・山内一生工房
- ・小原歌舞伎保存会
- ・豊田市歌舞伎伝承館